Ⅱ.人文学部向けの週４コマ集中フランス語について

高田晴夫

1.実施体制：

授業の実施体制として、３コマを日本人教員が、１コマを外国人教員が担当してきました。また、その方針は当初から変わっておりません。これは、ドイツ語、ロシア語、中国語も同じですが、違う点は、比較的多くの日本人教員が参加しているという点ではないかと思います。平成９年から、教員の所属を超えて、ローテーション方式で、人文学部のフランス語教員がすべて参加できるようにシステムを変えました。

2.教育内容：

過去６年間の「教養科目講義概要」を参照。

3．教授法：

文法・読本中心の受信型授業から、ロール・プレイ、インフォメーションギャップを利用した発信型の授業まで、学習目標に応じた教授法を採用しながら、個々の教員が創意工夫して授業を行っております。また、今年夏に行ったようなパリ鉱山大学との学生交流のような授業外活動に積極的に参加できるような機会を設けているのが特徴かと思われます。

4．成果：

さらに、受信型授業にかたよっていたそれまでの教育に発信型授業を取り入れる事が出来るようになった結果、４技能においてバランスの良い教育をほどこしています。また、極めてレベルの高い発信型授業ではないにしても、バランスのとれた本格的なフランス語学習への第一歩として、学生に対して、充分な動機づけを与えることは確実に出来たと思われます。

5．問題点：

集中フランス語の場合、ドイツ語やロシア語と違い、長い間、ベルギー人のフランス語が堪能な方がいたのですが、本当の意味でのネイティブによる授業は困難でありました。４年前から直聘非常勤講師の制度が導入されました。しかし、このポストの運用の難しさを特に強調しておきたいと思います。このような不安定なポストの教育に及ぼす影響は大変大きいと言えます。改善の余地があります。

Ⅲ．集中ロシア語授業の現状と問題

中澤敦夫

授業では、一貫した文法教育を行うという主旨で、一人の日本人専任教員が３コマを担当し初等文法を教え、残りの１コマをネイティヴの教員が担当し、発音、口頭での表現などのトレーニングを行っている。

一般にロシア語の初級では教えるべき文法事項が多いが、現在の新潟大学の教養教育では２年次以降の「中級」の段階で、さらに高度な文法を体系的に勉強する授業機会が少なく、また、現状では実用的なロシア語の知識よりも書かれていることを理解するための語学の要求が高い、などの理由から、集中的に初級文法を教える集中ロシア語の授業は非常に意義がある。

しかしながら、この５年間の実践で次のような問題点も現れるようになった。

① 教える側は「ロシア語の初等文法を集中的に学び、さらに高度な学習につなげる、レベルの高い授業」として位置づけていても、学生にはそのような意識は薄く、人文学部で必要とされる、初修外国語８単位をてっとり早く１年で履修してしまう機会としてとらえており、高度な学習につながらない。

② 初修外国語８単位を課している人文学部の学生（主に１年生）のための授業になってしまい、学習意欲のある他学部、他学年の学生の参加がほとんどない。

③ この数年の学生の全般的な学力低下の反映なのか、集中授業がはじまった５年前の学生のレ